

## 30年ぶりに大改革した入試制度「大学入学共通テスト」で求められる力とは 新カリキュラムで先手を打つ大学受験予備校・河合塾 | 日本経済新聞 電子版特集

知識に加え、「思考力・判断力・表現力」が問われる出題、英語を「読む・聞く・書く・話す」能力の評価、記述式問題の出題の増加――。これらはすべて、現在行われている大学入試センター試験に代わる新入試制度「大学入学共通テスト」で導入される事項だ。大学入試においては実に約30年ぶりの大改革で、今の中学3年生が大学を受験する3年後の大学入試から開始される。そのため新しい共通テストでは従来の常識や、詰め込み式の学習方法だけでは通用しない可能性があり、これまで以上に分析と対策が求められる。大学受験指導において80年以上のノウハウを有する河合塾に、大学入学者選抜改革の狙いやその仕組み、具体的な対策法などを聞いた。

### 新テストの大きな変更点は2つ

該当科目は国語、数学、英語



学校法人 河合塾

教育イノベーション本部

副本部長

教育企画開発部

部長

近藤 治氏

1978年度（79年1月）に国公立大学と産業医科大学の志願者を対象としてスタートした「共通一次試験」は、89年度に「大学入試センター試験」（以下、センター試験）に移行し、現在では約9割の私立大学も利用している。2020年度からの入試（2021年1月）では、これまでのセンター試験に代わり、「大学入学共通テスト」（以下、共通テスト）がスタートする。教育の企画開発のためこの共通テストの分析に当たった河合塾の近藤治氏は、「出題教科・科目数は現行のセンター試験と同じですが、出題形式と英語の試験内容に大きな変更があります」と説明する。

まず、共通一次試験以来、出題形式は選択式（マークシート）のみだったが、国語と数学で記述式が導入される。たとえば国語では、100字前後で記述する問題を含め3問程度出題され、解答は3～5段階で評価される予定だ。センター試験の問題の作成と採点は、実施主体である大学入試センターが担当しているが、共通テストでは記述式問題の採点のみ民間に委託される。

さらに、英語では評価される技能が従来の「読む・聞く」の2技能に、「話す・書く」が追加されて4技能評価になる。06年度からICプレーヤーを利用したりリスニング試験を実施しているが、50万人規模の試験に「話す」要素を取り込むことは現実的ではない。そこで、23年度までの3年間は移行期間として、大学の指定に応じて共通テストか4技能を網羅する民間の資格・検定試験のいずれか、または両方を受験する。認定される民間試験は現時点では未定だが、ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定（英検）やTOEFL、TOEICなどが候補に挙がっている。24年度以降は、民間試験に一本化される予定だ。

また、マークシート式の問題も、「大学入学者選抜改革」（以下、大学入試改革）の主旨に沿って出題内容が見直される。「モデル問題では、正しいものを『1つ』ではなく『すべて』選べとするなど、思考力や判断力をより重視するような工夫が見られました。マークシート式の問題の難易度は上がるとみられます」と近藤氏は分析する。

「大学入学共通テスト」の概要		
名称	大学入試センター試験	大学入学共通テスト
実施年度	～2019年度（2020年1月）	2020年度（2021年1月）～
日程	1月中旬2日間	1月中旬2日間
出題教科・科目	6教科30科目	センター試験と同じ ※2024年度以降は簡素化を検討
出題形式	マークシート式	数・国で記述式を導入 ※2024年度以降は地公・理も導入検討 【国語】・80～120字程度を3問程度 ・出題範囲は古漢除く「国語総合」 ・マークシート問題とは別の大問 ・試験時間100分に延長 【数学】・「数I」「数I・A」で出題 ・数Iの範囲を3問程度 ・マークシート問題と混在の出題 ・試験時間70分に延長
英語	2技能（Reading、Listening）を評価	4技能を評価、民間の試験を活用 民間試験の受験は高3の4～12月に2回まで 2023年度までは民間試験と共通テストの英語を併用（大学が利用方法を指定）
成績結果・提供方法	・各科目1点刻みで採点し合計点を提供 ・国語は「近代以降の文章」「古文」「漢文」の3分野を別々に成績提供	・マーク部分は現行より詳細情報（設問・領域・分野ごとの成績、段階別表示などを検討）を提供予定 ・国語は一括提供を検討 ・英語はCEFR※の段階別評価 ・記述式は段階別評価（3～5段階）

※CEFR [ヨーロッパ言語共通参照枠 / Common European Framework of Reference for Languages] : 外国語の学習・教授・評価（Learning, Teaching, Assessment）のための国際指標

●文部科学省「大学入学共通テスト実施方針」を基に河合塾が作成

アウトプットの機会を加え  
学びを深められる授業に



学校法人 河合塾  
進学教育事業本部  
教務統括部  
部長  
中村 政彦氏

文部科学省が進めている大学入試改革では、大学入学時点で備えておくべき学力として、これまでの「知識・技能」に加え、これをベースとした「思考力・判断力・表現力」、そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の学力の3要素を求めている。

こうした変化に対応するため、河合塾では例年の入試問題分析に基づくテキスト、授業、模擬試験の改編に加えて、知識と技能以外の「新しい学力」で問われる力を教科ごとに分析し、長年の教育研究成果と結び付けた新カリキュラムの作成に取り組んでいる。

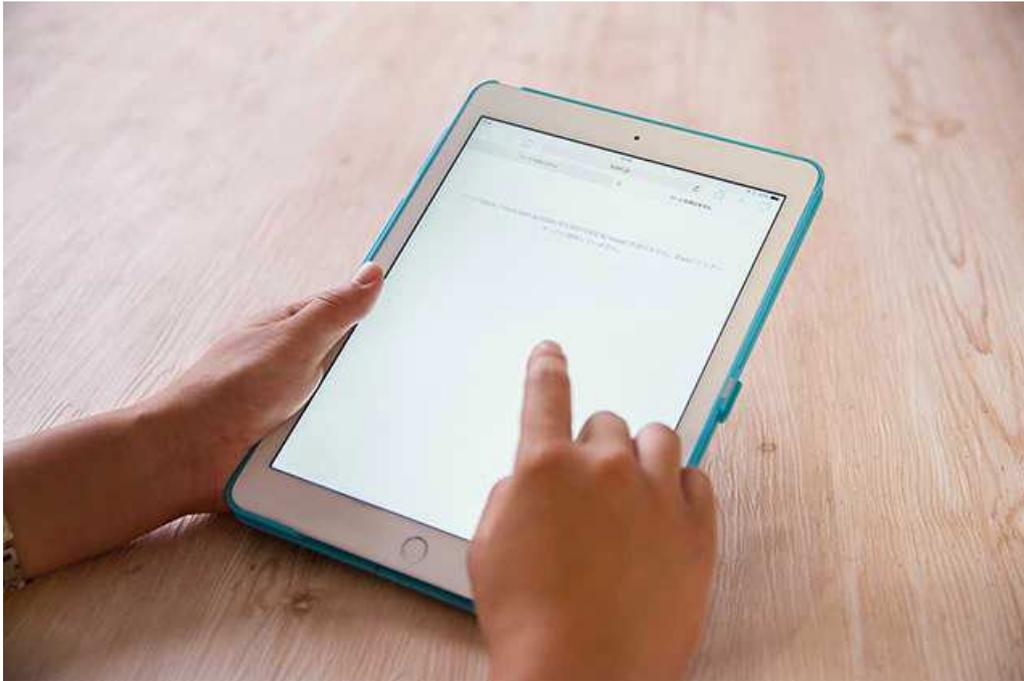
新たに導入されるポイントの一つが「学びを深める仕掛け」だ。河合塾では講師一人ひとりが創意工夫したエネルギーで迫力がある授業を強みとしており、生徒にも「楽しくてわかりやすい」「毎回新たな発見がある」と好評だ。「同じ講座でも、同じ授業はない」（近藤氏）という。

新カリキュラムではこれをさらに推し進め、講師が生徒に教えるという従来型の授業スタイルだけでなく、講師と生徒、あるいは生徒同士が双方向にやり取りする機会を増やす。新カリキュラムを統括する河合塾の中村政彦氏は、次のように狙いを説明する。「生徒の学びを深めるのに必要なことを研究してきました。その結果、学んだことをその場で『書いてみる』、または『話してみる』ことで内容が定着し、理解が深まることがわかっています。実際に授業で行い、生徒の満足度も学習効果も高かったので、本格的に導入することにしました」

また、新しい大学入試に対応して、2018年度の高1生から講座ラインアップを刷新する。数学の特定分野を極める講座、国語の読解力養成講座、英語の資格・検定対策講座など、個々の学習状況や目的にあった「オプション講座」も新たに導入される。レベル別の通常講座と組み合わせで受講し、一人ひとりにあった学習プランニングで苦手分野克服や新しい学力養成に活用する。

英語の4技能対策に向けては、技能別に独立して学習するのではなく、「聞いて書く」「読んで話す」「聞いて書いて話す」というように一つの講座の中で統合的に組み合わせ、効果的に伸ばす授業になるという。さらに、国際標準試験の一つである「ケンブリッジ英語検定」を無料で受験し、早い段階からの育成×測定により英語4技能を伸ばす。「民間試験の受験は、受験学年である高3の4～12月の2回までと決められています。誰でも緊張する対面のスピーキング試験は慣れも必要なので、高1生の段階から準備を始め、試験に慣れることでベストスコアが出せるカリキュラムにします」と近藤氏はその意図を説明する。

## 一人ひとりに最適なサポートを展開し 必要な学力を効率良くアップ



新カリキュラムではICTも積極的に活用する

生徒の学習・進路指導を行うチューター制度を、大学受験予備校として最初に導入した河合塾では、一人ひとりに最適な目標設定や目的・学習状況に応じた学習法のアドバイスのほか、最新の入試情報を提供。生徒の興味・関心・適性を踏まえ、最適な学習マネジメントを行っている。

さらに新カリキュラムでは学力アップを効率的に図るための仕組みとして、ICTを利用した「e-サポート」を新たに導入する。いつでもどこでもタブレットを利用して、河合塾の授業と連動した学習コンテンツによる予習・復習ができ、知識の定着や活用を効率的に進められる。また、理解度をチェックしたり、定着度に応じた課題を提示したりする。「授業と連動した30分程度の予習・復習用コンテンツを用意します。授業前後のすきま時間を使えるので、基本事項を解説動画で確認したり、解けなかった問題だけをやり直したりするなど、効率よく理解が定着します。講師もスタッフも生徒の理解度に応じて苦手なところを中心に、より効果的なアドバイスができます」と中村氏は双方のメリットを挙げる。

また、河合塾は、大学でキャリア教育などに取り入れられているコンピテンシー（行動特性）やリテラシー（活用能力）の測定テスト「学びみらいPASS」を活用。さらに、独自の資格制度「河合塾カレッジカウンセラー」を設けて生徒・保護者の相談やアドバイスに応じるスタッフの専門性や情報力を高めており、一人ひとりに最適な学習マネジメントと進路実現サポートの手法開発や体制づくりにも余念がない。「教科学力の充実も、新しい学力も、生徒に必要とされるものはすべて提供していく。そのために日々、研究開発を進めています」と近藤氏は力を込める。

今回の大学入試改革は、大学入試においては約30年ぶりの大改革で、受験生や保護者の不安も大きい。河合塾では定期的に三者面談や保護者会を通じて家庭との連携も図っており、18年2～4月には最新の入試情報を提供する全国イベント「親子で乗り切る大学受験」や、これからの入試で重視される「思考力」をテーマにした「学びみらいプログラム」なども実施する予定だ。

30、40代の保護者世代が大学受験した頃と比べると、高校で学ぶ内容も大学入試の種類も大きく様変わりしている。子どもがこれから大学受験に臨む家庭では、自分たちの経験に基づく先入観や思い込みにとらわれず、子どもと一緒に情報収集から取り組む必要があるようだ。